

## 〔学 会〕

## 東京女子医科大学々会 第117回例会

日 時 昭和38年1月25日(金)午後2時より  
場 所 東京女子医科大学本部講堂

### 1. 口腔外科領域における Spiramycin の治療効果 (口腔外科)

村瀬 正雄・高井 宏・○重藤 信

1954年、Pinnert-Sindico が北フランスの土壌より *Streptomyces ambofaciens* を分離し、それより新抗生物質を抽出し Spiramycin と名づけ、現在、各国において試用され始めている。これはグラム陽性球菌、*Neisseria*、*Corynebacterium* に有効で、他抗生物質とほとんど交叉耐性を示さず、毒性も少なく、消化管およびその他への副作用もほとんどないものとされている。さらに組織内濃度は脾臓に高く、血中濃度は *B. Subtilis* を試験菌とした重層法で測定した結果、1回1gまたは0.5g投与では最高値はそれぞれ1.6、1.3mcg/mlで2~4時間後であった。連続投与では、0.5g、6時間おきでは4回投与後に2.2mcg/mlを示した。臨床試験では、東京女子医大口腔外科を訪れた各種急性感染症(智歯周囲炎、骨膜炎、蜂窩織炎、歯槽膿漏症)56例に使用して85%の有効率を示し、また各種手術後の感染防止にも充分満足すべき結果をえた。副作用は投与例中1例に軽度の Nausea を経験したのみであった。

### 2. 初生児上顎洞炎治験例

(耳鼻科)黒坂 掬子

乳幼児急性上顎骨髄炎の型を呈し、初発症状が多様で、眼や口腔内への周囲付属器への影響が著明に先行することが多いため、耳鼻科医の診察を受けるまでに日数がかかることが多い。

本症例は2カ月の女児で、40.0°Cの発熱と右頬部腫脹のため眼科を受診し、急性涙嚢炎といわれて抗生物質療法を続けていたが軽快せず、約1カ月間症状が繰返され、発病より29日目眼窩蜂窩織炎の疑いで当耳鼻科診察を依頼されたものである。

主訴は右頬部ならびに眼窩部発赤腫脹で、圧痛が著明であるが体温は36.5°C、全身状態は良好であった。鼻内所見ならびに口腔内所見では異常を認めず、レントゲン写真で右上顎骨に瀰漫性陰影を認めた。

Caldwell-Luc 氏法に準じて犬歯窩粘膜に切開をおき、上顎洞開放ならびに搔把を施行し、下眼窩縁、頬骨突起に膿汁や壊死骨を認めたので完全にこれらを除いた。術後アイロゾン・シロップとクロマイ筋注を行ない、術後19日で治癒した。

誘因となる疾患は不明であるが、起炎菌は黄色ぶどう球菌であった。

### 3. 脳症状を主訴とせる肺癌の2症例

(中山内科)齊藤 文子

第1例は51才の男子で、頭痛・吐気・眩暈を主訴として入院した。静かにしていればこれらの症状は一時軽くなったが、次第に眼球振盪を認めるようになり、乏尿・頭痛・意識障害が出現するようになった。プレドニゾン使用により一時は軽快したが、体重減少が目立ち、吐気・嘔吐が強くなり、小脳症状・脳圧亢進症状が現われ死亡した。

剖検の検果、右側下気管支幹に原発せる癌で、大脳・小脳に転移があつたため脳症状を呈した症例であり、この他副腎および腎にも癌転移巣を認めた。

第2例は42才の男子で、頭痛・吐気・嘔吐を主訴として入院した。眼球振盪も認め、X線右上上葉に陰影を認めた。入院後更に眼瞼下垂・外転神経麻痺をきたし項部強直、ケルニッヒ症候著明となり、腰椎穿刺にて液圧著明上昇・細胞数および蛋白やや増加・キサントクロミーあり、髄膜炎を思わせたが無熱、次第に頭痛・吐気・嘔吐が激しくなり意識混濁をきたし死亡した。

剖検により右上気管支幹に原発せる気管支癌で、小脳に転移を認めた。

### 4. 〔症例検討会〕脳下垂体腫瘍

(司会)加藤 金吉

全文次号に掲載予定。

### 5. 〔綜説〕

造精視象を中心とした二、三の問題について

(解剖)串田つゆ香

造精現象に関する研究は1880年から1900年初期にわた